
IS ～運命を切り裂く剣～

ジョーカーアンデッド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 〜運命を切り裂く剣〜

【Nコード】

N6220Z

【作者名】

ジョーカーアンデッド

【あらすじ】

ISを唯一使える男がいた。
運命を変えた一人の男がいた。
この二人が出会うとき、何かが起こる！
運命の切り札を掴み取れ！

プロローグ（前書き）

独自設定を、含んでおります。

まだまだ未熟者ですが、宜しくお願いします。

プロローグ

遠い昔、1万年に一度行われる『バトルファイト』と言われる自らの種族をかけた戦いが行われ、ヒューマンアンデッドが勝った。

その数百年後、再び、人々が彼らの封印を解き『バトルファイト』が行われた。

そして、怪人たちは戦いはじめ、人々をも巻き添えにしていた。それを食い止めるために開発された『ライダーシステム』と呼ばれる物を使って、人々を守るために『仮面ライダー』と呼ばれる4人が立ち向った。

恋人の仇を打ち、おのれの恐怖心をも打ち勝つために戦ったギャレン。

邪悪な心に立ち向かうために戦ったレンゲル。

怪人から人間になるために戦ったカリス。

そして、人類を救うために戦ったブレイド。

『バトルファイト』も残り二人になった。

ギラファクワガタの先祖…ギラファアンデッド。

すべてを破壊する存在…ジョーカーアンデッド、もとい、カリス。

ギャレンは、ジョーカーアンデッドが地球を滅ぼすわけがないと彼を信じ、ギラファアンデッドに単身で立ち向かった。

そして、一斉にダークローチが世界に出てきた。

レンゲルは、それをやめさせるためにジョーカーに立ち向かったが、本能にあらがえずにジョーカーアンドッドがレンゲルを倒してしまう。

そして、残ったのは、唯一アンドッドを封印できるブレイドとジョーカーアンドッド。

だが、ブレイドは自らがアンドッドになることで『バトルファイト』に終止符を打たせなかった。

時は流れ、約200年後。

篠ノ之束が作った『IS』は、世界に流通し始めたが、同時に戦争にも使われる可能性もあると疑い、『IS』の中心部であるコアを427個残し、行方をくらます。

ただ、『IS』は、女性にしか使えないということで女尊男卑になってしまった。

だが、女性にしか使えない『IS』を唯一使えた男…織斑 一夏がいた。

そして、裏では『亡国機業』が、全世界を征服するための準備をしていた。

彼らは、見事、『亡国機業』の悪事をつぶせるのか！

運命の切り札を掴み取れ！

プロローグ（後書き）

コメント、お待ちしております。

プロローグ2（前書き）

グダグダになってしまった。

しかも、まだプロローグだあ！

束ちゃんのセリフもおかしくなった気がするう！

それでも、読みたい人はどうぞ！

ブローグ2

ここはとあるラボ。

ここでは、男女2人がひっそりと暮らしていた。

ガシャ　ーーン……ウィー……ガガッ、ガガガ

そして、今、ここで作業をしている彼女：篠ノ之　束は、427
個あるコア以外のコアを使って無人機の『IS』を作っていた。

「束ちゃん！夕食できたよ！」

「はーい！いつま行っきまーす！」

そういつて、束は、彼女を呼んだ男：剣崎　一真に駆け寄っていた。

「今日は、ハンバーグだ。」

「やったー！やったー！」

と、いい、彼に抱き着いた。

「わかった、わかった。」

そして、頭を撫でながら食卓へと向かった。

一真は、食卓でテレビを見てた。

「へえ、男子が『IS』を使える…か。」

「あつ、ソースとつて…！」

「ああ、わかった。それで、ちょっと聞きたいことがあるんだけどさ。」

男が『IS』を使えることってあるの？」

「ないない！あつたら男装した人か、特殊な人間だね。」

あつ！そうそう、そのことでさ、お願いがあるんだけどさ。」

「えっ？なに。」

久しぶりの、お願いだなあ。と、思い、そのお願いを聞き入れることにした。

あまり、束からお願いされたことがなかったからだ。

「あのさあ、いつくんの通ってる『IS学園』を守ってほしいんだけどいいかなあ？」

「いつくんって、織斑 一夏のこと？」

「うん！そうだけど〜！」

えっ、いつくんって一夏のことなんだ〜。「あれっ、でもなんでいつくんなんて言ってるの？」なんて言ってみたら、「いつくんと友達なんだよ〜。」と、言われ、大変なんだろうなあ〜と思った。

「で、なんで？また興味がわいたの？」

そう、篠ノ之 東は、興味がわいた人にしか話をしたことがほとんどない。

剣崎 一真も彼女にあることで気に入られ、彼女のラボに（強制的に）住むことになった。

「違う違う。まあ、それも少しは理由に入るんだけど。で、いつくんが狙われてるんだよ。亡国機業に。」

「亡国機業に。」と、言われたときに一真もタダ事ではないと思ひ真剣に聞くことにした。

「でも、何故、彼が亡国機業に狙われているんだ？」

そうだ。彼が狙われる理由がない。

なら、何故？

「たぶん、彼にもうすぐ贈られる『白式』が狙われてるんだと思うんだけど、『白式』は、戦闘能力は十分すぎるんだけど、テスト操縦者が乗った時は、IS適正が全員Cだったんだあ。」

「で、その『白式』が、今度、『IS学園』に置かれることになったからってわけなんだあ。」

「それで、その『白式』とその操縦者の織斑　一夏といっしょに守ってくれと。」

「そうなんだけどいいかなあ？」

と、上目遣い＋涙目で言われた。

もともと、断るつもりはなかったため、無駄なんだが。

「行くから、元に戻っていいよ。」

「そうだと思ったんだよお！」

そついい、後ろからだしたのは、偽造した教員免許と札束を手渡した。

「なにこれは？特にこの免許なんだけど。」

「これは、偽造した『IS学園』の教員免許、これで怪しまれずに学校に教師として行けるね。」

（偽造した時点ですでに怪しまれると思うんだが…。）

「あと、このお金は旅行代ね。守るのは良いけど、少しは、ゆっくりしてね。」

「えっ！あつ、ありがとう！」

「じゃあ、今日は寝ようか。」

と、言い食べ終わった皿を台所に置く。

「わかった。じゃあ、おやすみ。」

「おやすみなさい！」

そして、夜は更けていった。

次の日、一真は自分のバイク、『ブルースペイダー』に乗り、『IS学園』に向かった。

プロローグ2（後書き）

コメントお待ちしております。

女性の中に一人だけ男！？/新しい教育実習生登場！？（前書き）

あぶねえ！

ギリギリのところで剣崎出せた！

それでは、どうぞ！

女性の中に一人だけ男！？/新しい教育実習生登場！？

ここは、『IS学園』。

ここでは、IS操縦者を育成する場所である。

教師や例外を除いて、全員女子である。

そう、例外を除いて…。

（はあ、なんでこうなったんだろう…。）

その例外の人物…織斑 一夏は非常に困っていた。

なぜなら、彼の周りは今は女子だけ。

これなら、反応に困るのも窺える。

では、何故、彼がIS学園に行くことになったのか。

それは、彼の勘違いにある。

彼は、本来ならば私立藍越学園に行くはずだったんだが、試験会場を間違え、IS学園の試験機を動かしてしまったからである。

まったくもって、勘違い男である。

「では、自己紹介をお願いします。」

（どうしよう、気まずい空気だ。

この状況を打開しなきゃって思うけど、箒は助けてくれないし。

）

「…り…め君、織斑君。」

彼が、思考回路を巡ってる間に彼の順番が来たみたいだ。

「あのー、大声出しちゃってごめんね。

でも、“あ”から始まって、いま“お”なんだよね。」

「だから、自己紹介してくれるかな。」

「駄目かなあ？」

そういつて、お願いしてきたのは、山田 真耶先生だ。

「いやあ、そんなに謝らなくても…。」

（チャンスだ！

自己紹介なら、この気まずい空気を変えられる。）

と、思ったのかいきなり立ち上がった。

「あつ、えつと、織斑 一夏です。

宜しくお願いします。」

と、言ったとたん、後ろ、キラーン と言う感じの視線を感じた。

（なんか、悪いこと言っちゃったかな。

だが、ここで黙ってるって悪いイメージというレッテルが張られてしまう！）

そう思い、強く息を吸い込む。

ほかのみんなが、見守る。

「以上です！……！」

言った瞬間、他の生徒は、ガクツと倒れた。

「え、あれ、だめでしょ！「ゴンツ！」ズゴック！」

理解できてないのか、説明しようとしたら頭上から拳骨がふつてきた。

「ううっ！いったあ！つて、千冬ねえ」バゴン！

本日二回目である。

「学校では、織斑先生だ。」

「先生、もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。」

クラスへのあいさつを押し付けてすまなかったな。」

と、言って山田と交代したのは織斑 千冬だった。

（あれ？なんで千冬ねえがここに？）

（職業不詳で、家にも数回しか帰ってこない俺の姉が……。）

そう思っていると千冬が自己紹介が始まった。

「私が、このクラスの担任の織斑 千冬だ。」

「君たち新人を1年で使い物にするのが私の仕事だ。」

自己紹介が終わった瞬間、教室が一斉に騒ぎ始めた。

「きゃー！わたし、織斑先生が目標できたんです。」

「あえて光荣ですー！ー！ー！ー！」

「嫌いじゃないわー！ー！ー！ー！ー！ー！」

「ったく。よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。
私のクラスだけに集中させているのか？」
と、言い千冬は、頭を抱え始めた。

（千冬ねえが俺の担任？）

「で、お前はあいさつも満足にできんのか？」

「千冬ねえ、これはその…。」

「織斑先生と呼べ。」

「はい。織斑先生。」

再び教室がざわめき始めたので、「静かに！」と、一喝した。

「諸君らには、ISの基礎知識を半年で覚えてもらおう。
その後、自習だが、基本動作は半月で体にしみこませろ。
わかってても、わからなくても返事をしろ。」

ハイ！

「では、教育実習生として、紹介しておく先生がいる、入れ。」

はい、と、言いドアを開けはいいてきたのは…。

「初めまして。剣崎 一真です。お世話になるかもしれませんが
宜しくお願いします。」

そついい、剣崎は頭を下げた。

ついに、唯一ISを動かせる男…織斑 一夏と
運命を変えた男…剣崎 一真が出会った。

さあ、物語の幕開けだ！

女性の中に一人だけ男！？/新しい教育実習生登場！？（後書き）

コメント、お願いします。

2時間前の助っ人／優勝者と怪物（前書き）

はあ、またグタグタだ。

俺の体もボドボドだあ！

眠いが寒いから冬眠しそう。

冬眠ではなく永眠しそう。

だが、書く。

では、どうぞ。

2時間前の助っ人／優勝者と怪物

時間をさかのぼり、2時間。

ブウ~~~~ン……キキーーー！

「ここがIS学園かあ。」
にしても大きいなあ。」

そういつて、バイクを止めたのは、剣崎 一真だ。

「どうやって入ればいいんだ。」

そういつて、ちょうど女性が門番のようにいたので聞いてみた。

「あのお、入らせてくれませんか？」

と、束からもらった偽造した教員免許を見せると、女性…織斑 千冬は驚いた素振りを見せると、「ついてこい。」と言い、IS学園の中に入っていたので、一真も入っていた。

「単刀直入に聞くが、お前の持っているその教員免許、偽造した物だな。」

とある一室に入らされた後、そういわれた。

「ギクウ！」

（もうばれちゃったよ、どうしよう…。）
と、思った一真は、必死に逮捕されないように抵抗した。

「違うんです！これは、そのう…。

そう！これはその手違いでして、

間違えてっというか「もういい！通報はしない！」へ？」

なぜ？と思った一真だったが、次のことを聞いてしっくりきた。

「お前のことは束から聞いている。

近々、偽造された教員免許を持つてくる男がいるから、
保護してくれとな。

で、なにが起きたんだ。」

そういわれ、一真はこの前束に言われたことを話した。

「そうか、私の弟が狙われていると。」

「私の弟？それってどういう…？」

「おお、まだ言ってなかったな。

私の名前は織斑 千冬。

織斑 一夏の実の姉だ。」

（ええーと、なんか見たことあるなあ。）

「あつ！思い出した！そういえばテレビで見たことがある！
確か、『モンドグロツソ』で優勝して『うるさい！』『すみませんでした。』」

「で、なんで東はこんなはしゃぐ男を送り込んできたのか分からん。」「ハア」

「まあ良い。あいつが選んだんだ。少しは手ごたえがあるか。」

（すごい言いぐさ。。。）

「ところで、次からその偽装した教員免許を持つてくるのもいろいろと面倒だからな。」

「この教員免許を使い。」

と、言つて出したのは『ちゃんとした』教員免許だった。

「これは？」

「次からはこれで、学園内に入れ。」

一生他の教師にばれないという保障はないからな。

これなら、半永久的に教育実習生としてここに来れる。」

（前言撤回！やさしい人だった！）

と、心の中で涙ぐんでいた一真だった。

「では、今日から教育実習生として来てもらつて。」

「わかりました！って今日から！？」

「黙って来い！」

本日二度目だ。

「すいませんでした。」

「こうして、彼の教員実習生生活が始まった。」

2 時間前の助っ人／優勝者と怪物（後書き）

今度は、『仮面ライダー 龍騎』と『とある科学の超電磁砲』をクロスしよう。

コメント、宜しくお願いします。

金髪女王／怒鳴った怪物（前書き）

金髪、登場します。

剣崎、怒鳴ります。

作者、永眠しそう。

だが、執筆します。

金髪女王／怒鳴った怪物

休み時間。

教室では一真と一夏が話していた。

「勉強ついていけてる？」

「いやあ、難しすぎて、全然わかりませんよ。」

「だよなあ。最初は難しいもんなあ。」

「でも、頑張りますよ。」

「意気込みは、完璧だね」「ちょっと、よろしくて？」……え？。」

と、いった、たわいのない話をしていると2人の後ろから髪は金色でロールがかかっている少女が現れた。

見た目的には、白○ルナと似てるといったら似てるのかもしいない。
い。

「まあ！なんですよ、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なので、

それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？」

「「誰（^{ですか}）です（？）」「」

「はい〜〜〜!？」

私を知らないと？

あなたは、良いとして、教育実習生である剣崎先生まで。
いいですか！私の名前はセシリア・オルコットですわよ！」

「ふ〜〜ん。」

「絶対バカにしてるでしょ！」

覚悟しなs「キーンコーンカーン！」この恨み、あとで
きっちりつけますわよ！

あとで覚悟しなさい！」

そうして、彼女は去って行った。

「では、ただいまの時間をクラス対抗戦にでるクラス代表を決める
時間にします。」

と、山田が言った。

すると、即座に数人が手を挙げ、その全員が織斑君がいいと言っ
てきた。

そうしたら、セシリアがいきなり立って言った。

「待ってください！納得がいきませんわ！」

「何で、納得がいかないんだ。セシリア・オルコット。」

と、めんどくさそうに千冬が言ってみた。

「そのような選出は認められませんわ！」

大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！

わたくしに、セシリア・オルコットにそのような侮辱を一年間
味わえとおっしゃるのですか！？」

一夏が、立ち上がって反論しようとしたが、一真がそれを制した。

「そもそもですわん」「いい加減にしろ！」「：！」

いきなり怒鳴ったのは、一真だった。

「それ以上言ってみろ、オレハクサマラムツコロス！」

それに、ここは、いまお前のわがままを言う時間じゃない！

正々堂々と相手と戦ってから言え！」

どこぞのロリコンライダーの迷言を言いつつ、セシリアに怒鳴った。

その後ろでは、彼を見直したのか、なぜか誇らしい笑みを浮かべた千冬がいた。

そして、頭を冷やしたのかセシリアが言った。

「そうでしたわね。」

剣崎先生の言う通りですわ。

このセシリア・オルコット、一夏さんに正々堂々と決闘を申し上げますわ。」

「ああ、臨むところだ!」

こうして、剣崎の教育実習生活1日目が、終わった。

金髪女王／怒鳴った怪物（後書き）

コメント、お願いします。

決闘開始／決着と異形の怪人（前書き）

熱をひいてしまった。

とにかく、だるい。

剣崎が、ほとんど出ない。

だが、書く！

決闘開始／決着と異形の怪人

決闘当日。

一夏とセシリアが準備をしていた。

一真は、彼が守る対象でもある、『白式』が届いたということですぐさま、向かった。

「おい、剣崎。」

「なんでしょう、織斑先生。」

「あれが、お前が守る『白式』だろう。」

「そうです。」

でも、僕が守るのは一夏君や白式だけじゃありません。
この地球上のあらゆる人々を救いたいんです。
たとえ、この身に何が起ころうとも。」

「頼もしいな。」

だが、一人で抱え込もうとするな。」

「わかってるつもりです。」

「2人とも。」

一夏君がスタンバイ終わりましたよ。」

「わかった、山田君。」

行くぞ、剣崎。」

「ハイ。」

こうして、決闘が始まった。

「最初に言っておきますけれども、

正々堂々と戦わなければ、

私の小間使い。

いえ、奴隷にしますわよ。」

「上等だ！」

そう言い終えると、いきなりセシリアがビームライフル：スター
ライトmkⅠⅠⅠをぶっ放すと、白式に直撃し、何とか持ちこたえ
たが、立て続けに撃ってきた。

それからは、一夏の防戦一方だった。

「さあ、踊りなさい。わたくしとブルー・ティアーズの奏でるワ
ルツで！」

何とか、手で防御しているが、シールドエネルギーが徐々に少な

くなっていく。

「装備…装備…って、これだけかよ！

まあ、素手よりかはいいか！」

「遠距離射撃型の私に、近距離格闘型で挑もうなんて…正気ですの！？」

と、言いながら撃つが、一夏はコツをつかんできたのか難なく避ける。

「このブルー・ティアーズを前にして初見で、
こうも耐えたのは貴方が初めてですわね。
褒めて差し上げますわ。」

「そりゃどうも。」

「でも、そろそろフィナーレと参りましょう。」

すると、周りからも撃たれるようになり、よけきれなくなった。

「左足、頂きますわ！」

だが、よけられた。

「イチか、バチか！」

そついつと、銃弾をよけ、下から上に上昇した。

「うおおお！」

近ずけたとき、剣を振りかざすが後ろに後退し、よけられる。

「むちゃくちゃしますわね！」

でも、無駄なあがきですわ！」

周りからも、セシリアの銃弾が撃たれるが、一夏はわかったように言った。

「わかったぜ。」

こいつらは、お前が命令しないと動かない。

しかも、そのたびに、お前はそれ以外の攻撃ができなくなる。」

「それは、意識を集中させてるからだ、そうだろ！」

「残り2機。」

あとちよつとだ！」

「わかりましたわ。」

4機だけではありませんのよ！」

「しまった！」

セシリアの放った、ミサイルが当たる。

「えっ！」

まさか、ファーストシフト！

あなた、今まで初期設定で戦っていたとでもいうのですか！？

「よくわからないが、これでやっと俺専用になったみたいだな。」

「ああ、もう面倒ですわ!」

「見える!」

その瞬間、周りの機体を破壊し、一気にセシリアの乗るブルー・ディアースに接近する。

「おりゃー!」

そして、自身の武器：雪片式型で斬ろうとするが、いきなり、シールドエネルギーが切れ試合終了のブザーが鳴り、「勝者、セシリア・オルコット。」とアナウンスが言う。

それもそのはず、雪片式型はシールドエネルギーを使い斬る刀だ。

そして、啞然とした顔でつたてている2人のところに、何かが落下してきた。

「危ない!」

そういい、自らも一緒にセシリアを押し、その場から逃げる。

「なんだ!？」

と、言い2人は落ちた場所を見る。

すると、そこには一体の異形の生物が立っていた。

決闘開始／決着と異形の怪人（後書き）

コメント、お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6220z/>

IS ～運命を切り裂く剣～

2011年12月25日17時48分発行